神様の子

シリウス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神様の子

【Ｎコード】
Ｎ１３４１Ｏ

【作者名】
シリウス

【あらすじ】
６才なのに頭・身体能力がすごくていじめられていた
いつの間にか知らないところにいたそこで生まれたと言われたが全く覚えていない
その子の正体は・・・・・・

人間それとも創造主？

あれなんだろここ

懐かしいようなでも思い出せない

そこには草原が広がる世界があった

そこに1人の2才くらいの女の子と5人位の大人がいた

とても楽しそうに笑ってる

あれは誰だろう知ってる人だろうか

さーーーーーーーー

あっ待ってもっと見たいしりたい

がばっ

「ゆ・め？

どうんな夢だったけ

もう思い出せないや

あれここどこ？

ベットで寝ていたはずなのに

男の人がこっちに来た

「さあこっちへどうぞここのことを教えてあげます

「うん

私はいま6才なんだけど見た目は5才とか言われてる

そう言われてついてったところはお城見たいなところだった

「つれてきました

「御苦労

「姫！ようこそおかえりなさいませ

ひめ？姫ってどういうこと

「どういうこと？

ザワッ「覚えてないのか

「どういうことだ

「まさか

「姫とりあえずここにお座りください

「でもここって・・・
「ここは姫の場所です
遠慮しないでください
「うん・・・
王座みたいなところに座っていいのかな
まあ座るしかないのかな
「姫はここのこと覚えていないのかな
「ええごめんなさい
「謝んなくていいんだよ
「うん
「率直に言おう
「イグゼラ！！
「言わないとしょうがないだろう
「そうだけど
なんだろう
「お前は人間じゃない神だそれも創造主だ

私は人間じゃない・・・
う・そ・・・

「バケモノ！！！
「バケモノ！！！
いやっやめて私は人間！
ちゃんとした人
「お前人じゃないだろ
違う私は人
「違う違う
「じゃあなんであんなことできるんだよ
「そうだふつうはあんなに高く飛べないぞ！
わかんない。わかんないよ
私にだってわかんないよ
「バーケモノ

「ひ・・・ひめ・・・姫！

さっきのって・・・

ああそうだあれは４才の時の記憶だ

「おい聞いてんのか！！！

「ちょっとイグゼラ！言いすぎだよ

「うるさい

おまえは人間じゃない神だ

人間じゃない・・・

あの子たちがいっていたのは本当だったんだ

私は人間じゃない

人間じゃないんだ

そんなのウソだ　ウソだ！！！！！！！！！！

「いやっいやっ

私はそこをとび出してしまった

「姫！
私は姫なんかじゃない
私は神でもない
人間・人間なの
「ああ行っちゃったね
「あいつ記憶ないのか
「そうみたいだね
しかもあの様子なにかあったみたいだね
この3年のうちに
「ああ…

ここどこだろ
きれいなところ
やっぱり懐かしい
もしかしてきたことがある
あの人たちもそんな感じだったし

『お帰り姫

『おかえり

「誰っ

『もしかして覚えてない

『そうみたい
　僕たちは精霊

『昔よく遊んだんだよ

「昔？やっぱり私ここに来たことがあるの

『当たり前じゃん姫はここで生まれたんだから

「私はここで生まれた・・・

『姫また歌うたって

「うた？どんなの

『えっとね
　川と花がでで来るうた

「これかな・・・
　かわとそよかぜなびいてる～
　そこにはなのこうまれて～
　やさしいひとにまもられながら

ずうっとずうっといきていく〜

『やっぱり姫だね

『あれアクア様と

『ゼウス様だ

アクア・ゼウスこの名前って聞いた事がある

「姫！！！

女の人が抱きついてきた

この感じ私は知ってる

「うっ

バタッ

「姫！

「早くこっちに

「ええ

世界づくり

ここどこ？

次は真っ白な世界だった

「お帰り

「あなたは・・・

「私のことも覚えてないのかい
力加減間違ったかな・・・
まあとりあえず記憶思い出して

パチン

目の前の人が指を鳴らすと私の中にぼうだいな記憶が戻ってくる

「うっ・・・・・・・・・・・・・

「思い出したか

「うんお父様

「そうかよかった
お前を人間界に送ったのは人の気持ちを知るためだ
世界を作るにあたってそれは、大切なことだからね
神の記憶を一時的に消したことによって辛い思いをさせたね
済まなかった

「もう…いいよ
ここに帰ってこれたし
「そうかではまた会おう
「あっ待って
まだ聞きたいことが
ばっ
「姫・・・
私は涙を流してしまった
久しぶりにお父様にあったために
「姫・・・なにかあったのですか
「アクア・・・夢の中でお父様にあったわ
「元創造主様にですか
「うん
私の記憶を消してたのはお父様だった
「それでは思い出したのですか
「ええ
アクア、ゼウスを呼んできて

「はい

キイ

「呼びましたか

「神の力をコントロールしたいの
手伝ってくれる？

「もちろん

「すごいですね3か月でマスターするとは

「そんなことないわ

「それにしてもなぜそんな姿に変身をしてるんですか

「だって・・・元の世界だったらもうこんなになってるんだよ
天界は時間の進みが遅いんだもん

「人間界にいても神の力を持っているのでそんなに大きくなってはいませんよ

「でもいろいろとベンリだしね

「はいはい

その3ヶ月後

――――――――――――人間界――――――――――――

俺は不思議な力を持っている

それに気がついたのは5才の時だった

その日俺は森に遊びに行っていた

そこであやまってバッタを殺してしまった

その夜大急ぎで家に帰ろうとして階段をジャンプすると・・・

いつもの俺では無理なほど高く飛べたのだ

それだけではなく父さんと川に行って魚を食べた後

泳ぎがとてもうまくなった

カマキリをかごに入れといて忘れてて殺してしまったあと

剣がとてもうまくなった

そんなことがあって俺は殺してしまったもののいいとこをとることがわかった

俺はその力をいいものだと思ってたあの日が来るまでは

俺は学校でいじめられていた

それである日自殺しようとした

包丁で手首を刺そうとした時俺は意識を失った

かすかに意識があったなかで覚えているのは

俺に黒い翼が生えみんなを殺しさいごに世界を殺したところだった

次に気がついた所は草原の中に大きな湖が見えるところだった

――――――――――――――――天界――――――――――――――――

「うっうわ――――――――――――――――

俺がみんなを殺した俺の中に変なものが渦巻いているのがわかる

この中に俺の父さんたちもいるのか・・・
俺がみんなをこんな風にした
「うるさいわね
「おまえ、は誰だ
「私！私は神よ
「かみ・・・
「なんていう
「神に名前を聞くなんてなんて殺してやる
意味わかんねー
バシュ
俺の体に白い羽みたいなものがぶつかってきた
別に痛くもなんともないが
「なんで、何で死なないの
「俺は世界を殺した
「それじゃあ私じゃ殺せないわね
私の名前はマイ

フルネームじゃないけどね
あなたは？
神が俺に近ずいてきた
「くるな！こっちに来るな
頼む殺してしまいそうでこわいんだ
「私を殺しちゃいそうで？
「・・・そうだ
「それなら大丈夫よ
私は殺せやしないから
バキッ
ふざけてる自分で自分の手をもぎ取りやがった
治ってく・・・もぎ取った手が消えて代わりに神の腕の所に手がはえていく
ある意味グロい
「ほらねっ神と言うのは世界そのものだから世界を殺さない限り
神は殺せないのよ
バシュ

俺は神を殴った
すると神の上半身が消えた
「確かめだ
「ククク面白い
治ってく
こいつとなら一緒に入れる
「さっわかったところで
あなたの名前は
「勇
「ユウね
じゃっ行くわよ
「どこに？
「魔法世界へよ
マイに引っ張られて俺はどこかへ行く

その1か月前

―――――――――――――――――天界―――――――――――――――――

「こんなものでいいか

いろいろな世界を作りました

マンガなどももちろん

植物の国・動物の国など様々です

そこで2か月前の回想行きまーす

＊＊＊回想＊＊＊

「世界を作る？

「そうです創造主の仕事はそれです

「へーどんなのがあるの

「どんなのでのいいんです
マンガなどのでもいいし
植物だけの国でも

「もしかして魔法がある国も作れる！！

「ええ

「どうやるの

「その前に注意事項が一つあります
世界を作ってるときは1人でいること
その世界の精霊などは大丈夫ですけど
まあドアを作って仕掛けでも施しておくんですね

「わかったわ

「ではこれ説明書

ということなので扉を作ってなかに異空間を作ってみた

その中は真っ白にして扉をいくつも作った

一番手前のプレートに魔法世界と書き込んでなかに入った

では早速説明書をっと1ページは・・・

えっと世界の元を作りましょう

世界の元を作るときはどんな国を作りたいか

創造しながら作りましょうか

もちろん創造するのは魔法があってドラゴンとかがいちゃう世界

できた!!!

次はそれをおとして真っ暗な空間を作りましょうか

よしポイッとぽっ

できたまるで宇宙だね

次はそこに1つの惑星を作りその惑星の周りに小惑星を作りましょう

その時のコツは愛です！

・・・・・愛？そんなもん必要なのか

まあいいか

愛愛愛愛愛愛愛

デリャ

できた！！！世界作るって楽しー

でも真っ青だぞ

えっとその時の惑星は真っ青ですね魚だらけの惑星を作るときはそのまま次の工程へ

そのほかは陸を作ります

初心者は5つくらいの陸を作るといいでしょう

へー

えっとこうしてこうしてこうするか

次はたいようです
太陽を作るときは暑い心で作りましょう
もういいよまあ一応やるけど
えっとあついこころあついこころあついこころ
できたあつ近！！！太陽の時だけ何でこんなに近いの
次はあとは自由です。生命を作るときは愛と自由な心で作りましょう
待ってましたえっとまず人でしょ
それからエルフ・冥人・ドラキュラ・龍人
あとドラゴンとか動物・植物っと
どこにすまわせよっかな～
やっぱり人は一番大きい大陸でドラキュラと龍人は中くらいの大陸で
エルフと冥人は小さい大陸っかなほかはいろんなところに散らばせ
てっと
こんなもんかな・・・
あれ説明書まだある
なになに最後に精霊を作りましょう

管理や土地の発展を助けてくれますっか

土と水と火と風と電気と空と地と植物と動物と知識の精霊がいればいいかな

精霊を作るとでてくるときに霧がでてきた

『始めましてお母様

とまあ世界ずくり何となく楽しくもあり大変だったな

まっ今となっては書類の作成ばっかだけどね

一度自分の作った世界へ行ってみたいな・・・・・・

リリ

「失礼しますあの大変申し上げにくいのですが

「神たちが誰がどの世界を担当するか言い争っているのですが

「どうして？

「神たちは長い年月を生きるために暇つぶしを探しているんだ

「おまえが作った世界はどれも暇つぶしに最適な世界ばかりだからな

「ハァ

しょうがないくじ引きでもするか

「それが妥当だな

「ではこれから誰がどこの世界を担当するかくじで決める

「ワーーーーーーーーー

何がそんなに楽しいんだか

まぁとりあえず釘をさしとくか

「あっいっとくけど喧嘩したら・・・・・・わかってるよね

ブンブンブン
みんな首を縦に振ってるよかった
そんなに私怖いかな
まぁとりあえずいっか
これで私に被害はこないはず

――――――――――――魔法界――――――――――――

「おいどこに行くんだよ
「町に決まってんじゃない
「で町がどっちかわかってんのか
「神をなめないでよ
町はあっちね
歩いて１０分くらいかしら
「じゃあ行くか

「ええ

１０分後

「ほらあったでしょ

「ああ

でも俺らお金ねえぞどうするんだ

「ギルドってところがあるからそこでお金を稼ぎましょう

チリンチリン

ここにも客を知らせるスズがあるのか

「ねえ今ここにある一番難しい仕事は

「ハァ何言ってんだよおまえ死ぬぞ

「うるさいわねさっさとだしなさいよ

「まあいいけどよ

これだ

「えっとどうぐつの破壊

何これ

「そこがあるあたりは魔獣がいっぱいいるんだ

「そこのどうぐつに親玉がいるんだけどよ

どうぐつから出てこねえんだ

「わかったわどうぐつを破壊すればいいのね
そういえば店の前にあったあの石なに

「あれはだいぶ昔からあったんだけど誰も動かせねえからほっといてんだ
べつになんでもねえよ

「ふうーん

「やっぱりやめとけよ
死んじゃったら何にも残らないぞ

「じゃあ賭けをしてみる？
１分以内に私たちがあのどうぐつを壊したら報酬は１００倍
負けたら私たちができることを何でもする
どう

「ほんとにいいのかよ

「ええ

「じゃあカウントダウン始め

「ユウ行くわよ

「えっ

どうするんだ俺には無茶としか思えない

「ユウこれを・・・・・・・・・・

「わかった

そうするのか確かに俺ならできるけども

「よっこらせ

俺は店の前の大きな石を持ち上げて
どうぐつに向かって投げた

「何秒？

「３６秒・・・・・・

「まあまあね
さあ報酬の百倍よ

「まさか・・・本当にやるとは

こうして俺とマイは金板７６枚金４８枚という大金（？）を手に入れたのだった

ズルイ・・・

その夜俺とマイは空き家にとまった

「マイこの国のお金ってどうなってるんだ

「そういえば教えてなかったわね
一番価値が低いのが銅貨その次が銀貨・銀板・金貨・金板となるわ
それぞれが１０枚でつぎのお金と変わるわ

「へー

「まあ覚えておいた方がいいわね

そういえばこいつ最初にあったころと性格変わってないか

「俺ちょっと散歩に行ってくるわ

「行ってらっしゃい

星がきれいだ

「キャーーーーーーー

どこから声がした・・・・・・

森か

いそごう

――――――――――――？？？――――――――――――

私は親に売られて奴隷となった

いやだった家に帰りたかった

でも手錠が邪魔して無理だった

そこに１人の男が私を買った

いやな予感がしたでもどうすることもできなかった

歩いていると森に入った

森の中を１０分ほど歩くと男がこっちを見た

その目はけがれた目をしていた

私をなめずりまわすように見た

そして男は私の服を脱がした

抵抗したけど女の私の力じゃ無理だった

しばらくすると私の白い肌があらわになってしまった

男は私に近寄ってきた

もう駄目だと思ったその時
男が急に倒れた
私はなにがなんだかわからない中倒れた
「うっん
「おっ起きたか
マイ起きたぞ
「ん〜
どこだろここ
「あの・・・
「んっ
「助けてくれたんですか？
「んッまあ…
「どうしてですか
こんな奴隷なんかを
「嫌がってたし
「そんな理由あり得ない

「そうか
俺としてはちゃんとした理由だと思うがな
「むちゃくちゃです
「そういえばおまえこの後どうするんだ
家に帰るのか？
「いえ…
うちに帰っても私にはもういる場所ありませんから
「そうかなら俺たちと一緒に来るか？
「いいんですか
「おうっ
なっマリ
「別にいいわよ
「じゃあそろそろ出発するか
おまえ名前なんて言うんだ
「リリです
「よろしくなリリ
俺は頭をなでようとしたがやめた

俺が触ったら壊れてしまうかもしれないと思ったからだ

マリは俺がさわっても死なない

でもリリは普通の人なんだ

俺なんかがさわったら壊れてしまうかも知れない

「行くか

俺の旅は始まったばかりだ

ドラゴン

「あーもういやだこんな退屈な世界

私が最初に作った魔法の世界に行ってみよっかな

ゼウスはうるさいから書置きしていこう

申請書もついでに頼んでおこう

えっと

ゼウス・アクアへ

ちょっと暇なので魔法の世界リュルクルスに行ってきます

知られるとゼウスがうるさいので書置きで許してね

姫より

ＰＳ申請書出しておいてね

これでよしっと

さあこっちに来る前に行っちゃおっと

ギギギギギギギギギギ

扉を開けて私は魔法の世界へと向かった

――――――――――――5分後――――――――――――

「ゼウス様大変です

「何事だ

「姫が脱走しました

「なに

ここまで我慢していたがついには無理だったか

「行先は

「はい姫の部屋に書置きが

ゼウス・アクアへ

・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・

あの姫が

「姫の暴走が起こった時に備えてすぐ行けるようにしておけ

「はっ

「暴走しないといいんだが

――――――――――――――――魔法界――――――――――――――――

やった自分が作った国に一回来てみたかったんだ

それにしても

「きれ――――――――――――――――

そこには一面の花畑があって彼女を迎えているようだった

『お久しぶりですお母様

「うん久しぶり

『よくぞここにいらっしゃってくださいました

「うん一回来てみたかったんだ

自分が作った世界に

『それは願いがかなってよかったですね

「うん

あっそうだ男に姿を変えとこ

「これヘンじゃない？

『ええですがその姿でそのしゃべり方というのはちょっと・・・

「ああごめん

「キャーーーーーーー

「なに

『わかりませんが森の方から聞こえました

「行ってみるよ

『はい

そこには1人の女の子と一匹（？）のドラゴンがいた

『お母さんあれはフロリュスドラゴンで生きた伝説ともいわれてます

「へーそれにしてもやっぱドラゴンってかっこいい

でもそんなことする子にはお仕置きだぞ

「ジャマダドケジャマスルナラオマエモコロスゾ

「ほんとに不良だね
　それならここで頭を冷やせ

ここに来る途中出しておいた杖でドラゴンの足元に穴をあけた

見事にその穴に落ちて行った

うーんそうかい

『ちょっとひどくないですか

「大丈夫ちゃんとご飯を用意しているし

『そうですか

「あっ忘れてた
　君大丈夫？

「ひゃひゃい大丈夫でふ

ほんとに大丈夫かなすごいかんでんだけど・・・

「あッあの

「はっはい

おっもとに戻った

「じゃあもう行くね

「えっ……じゃあなに「姫様ーーー

びくっびびった～

一瞬ゼウスたちが来たかと思った

わかるわけないよねこの格好だもん

「じゃっまた

たたたた

「行ってしまいました

――――――――――――――姫――――――――――――――

「キャーーーーーーー

マウ達とはぐれているうちにドラゴンと会うなんて

しかもフロリュスドラゴンって

この世界に一匹しかいないのに

あたしってやっぱり運悪いのかな

こんなことなら朝お母様に止められたときにやめとけばよかった

ガサ

なに

そこに現れたのは1人の男の子だった

しかも黒い杖を持ってる

「へーそれにしてもドラゴンってかっこいい

ドラゴンがかっこいい？あんなに恐れられているいきものが・・・

「でもそんなことする子にはお仕置きだぞ

お仕置き？倒すということでしょうかやめた方が

「ジャマスルナジャマヲスルトオマエモコロスゾ

やっぱりそうなりますよね

「ほんとに不良だね

それならここで頭を冷やせ

なんか私一人でボケたり突っ込んだりしてるみたい・・・

なに…あれねんしょうもなしであんなでかい穴をあけるなんて

しかも見たこともない魔法

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・
君大丈夫?

「ひゃひゃい大丈夫でふ

かみかみではずかしい〜〜〜

「あっあの

「はっはい

「じゃあもう行くね

なにかお礼を

「えっ……じゃあなに「姫様ーーー

マウ達・・・いなくなっといて今来るとはころす

「じゃっまた

えっまだ何も

たたたた

「行ってしまいました

「姫様大丈夫でしたか

「ふん知らない

「へ

なんか姫様の機嫌が・・・・

ドラゴン（後書き）

みなさんサブタイトルとかってどうやって決めてるんですか
私毎回悩んで最後は結局これでいいやって形になっちゃうんですが
なのでサブタイトルは気にしないでおいてください

お知らせ

しばらく2つの作品に没頭したいと思っています

こちらの都合で申し訳ありませんがご承知ください

次の投稿はいつになるかわかりませんがそのときはぜひよろしくお願いします

こちらの都合で本当に申し訳ありません

シリ

ウス

本当に申し訳ありません

次の作品を楽しみにしておいてください

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1341o/

神様の子

2010年11月3日13時13分発行